

クビライ牛年(1277-1289)聖旨(1)のパスパ文字

吉池孝一

1. はじめに

「クビライ牛年(1277-1289)聖旨(1)」はパスパ文字モンゴル語と漢語訳が合璧となった聖旨碑である。牛年は1277年もしくは1289年に比定される。呼格吉勒図・薩如拉 2004(注1)によると、原石は山西省交城県石壁山玄中寺に、原拓は北京大学図書館にあるという。モンゴル語部分の比較的鮮明な拓本影印として呼格吉勒図・薩如拉 2004がある。漢語部分の拓本影印は Franke1966(注2)がある。以下、この碑文のパスパ文字につき、気の付いた点が幾つかあるので紹介する。

パスパ文字のローマ字翻字は次のようにする(注3)。

子音 は、**ᠮ**g **ᠮ**k' **ᠮ**k **ᠨ**ᠭ **ᠨ**d **ᠨ**t' **ᠨ**t **ᠨ**n **ᠯ**ᠯ **ᠯ**b **ᠯ**p' **ᠯ**p **ᠯ**m **ᠮ**f (**ᠮ**f1 奉母、**ᠮ**f2 非母・敷母。f1 と f2 の区別がない場合は f とする。なお数字の 1 は濁音に 2 は清音に対応する。以下同様) **ᠮ**v **ᠮ**ᠶ **ᠮ**č' **ᠮ**č **ᠮ**ñ **ᠮ**š (**ᠮ**š1 禅母、**ᠮ**š2 審母) **ᠮ**ž **ᠮ**ᠵ **ᠮ**č' **ᠮ**č **ᠮ**s **ᠮ**z **ᠮ**ᠶ **ᠮ**h (**ᠮ**h1 匣母、**ᠮ**h2 曉母) **ᠮ**ᠶ **ᠮ**y (**ᠮ**y1 喻母、**ᠮ**y2 幺(影)母) **ᠮ**' **ᠮ**r **ᠮ**q とする。

半母音 は、**ᠮ**ü **ᠮ**i とする。

母音 は、**ᠮ** (音節中は**ᠮ**。以下同様) u **ᠮ**(**ᠮ**) i **ᠮ** / **ᠮ** / **ᠮ** / **ᠮ** (**ᠮ** / **ᠮ** / **ᠮ**) é **ᠮ**e **ᠮ** / **ᠮ** (**ᠮ** / **ᠮ**) o とし、母音の a を補写する。

なお、音節間の余白はハイフン「-」で、多めの余白は「-----」で、欠落等により文字が見えない場合は[]で示す。

2. ローマ字翻字及び補訂

照那斯图 1991(注4)と呼格吉勒图・薩如拉 2004 にローマ字翻字・転写および漢語原文があり参考となる。両書には幾つか訂正すべき点があるけれども、単純な誤植とおもわれるものについては言及しない。

パスパ文字モンゴル語部分

1. moᠩ-ga-dêᠩ-ri-yin- k' u- č' eu-dur-----
2. yé-ke-su- ṣa-li-yin-• i-h• en-dur-----
3. q• an----- ṣar-liq-----ma-nu-----
4. -----č' e-ri-• u-dun-no-yad-da-č' e-rig-ha-ra-na-
5. -----ba-la-qa-dun-da-ru-qas-da-no-yad-da-yor-
6. -----č' i-qun-ya-bu-qun-él-č' i-ne-d• ul-qa-qué-
7. ṣar-----liq-----

8. ĵiŋ-gis-qa-nu-ba-q• a-nu-ba-ĵar-liq-dur-do-yid-ér-k' e• ud-sén-šhi-ŋuŋ-daš-mad-'a-li-ba-
 9. 'al-ba-qub-č' i-ri-'eu-lu-'eu-ĵen-dēŋ-ri-yi- ĵal-ba-ri- ĵu-hi-ru• er-'eo-gun-'a-t' u-qayi-
 10. g• ek' -deg-sed-'a- ĵu• ué-é-du• e-ber-beo• e-su-u-ri-da-nu-----
 11. ĵar-li-qun-yo-su• ar-'a-li-ba-'al-ba-qub-č' i-ri-'eu-lu-'eu-ĵen-dēŋ-ri-yi- ĵal-ba-ri-
 12. ĵu-hi-ru- • er-'eo-gun-'a-t' u-qayi-g • en-t' ay-'üen-fu-dur-bu-k' un-ši-bi-zhi-dur-'a-qun- • an-
 šiŋ-
 13. leu-da-ba-ri- ĵu-ya-bu• ayi-----
 b• o
 14. ĵar-liq-'eog-beé-é-de-nu-seu-mes-dur-ge-yid-dur-'a-nu-él-č' in-bu-ba• u-t' u-qayi-u-l• a-
 15. ši• u-su-bu-ba-ri-t' u-qayi-ts' aŋ-t' am-qa-bu-'eog-t' u-geé-qa-ĵar-u-sun-baq-t' e-gir-med-ya-
 16. • ud-k' e-ĵi-'a-nu-bu-li- ĵu-t' a-t' a- ĵu-bu-'ab-t' u-qayi-é-de-ba-sa-do-yid-----
 17. ĵar-liq-t' u-g• e- ĵu-yo-su-'eu-ge• ué-'eué-les-bu-'eué-led-du-geé-'eué-le-du• e-su-'eu-lu-
 18. • u-'a-yu-qu-mun-----
 19. ĵar-liq-ma-nu-heu-k' er- ĵil-qa-bu-run-t' e-ri• un-za-ra-yin-qo-rin-t' a-bu-na-----
 20. -----tay---du---da-
 b• o
 21. -----bu---gué---dur-
 22. -----bi----č' i----beé-

本碑の文字は、一音節毎に連書され音節間の余白も十分に取られている。なによりも特徴的なことは、文字数の少ない音節の後には余白を多目にとり横に列を揃えていることである。上の翻字にこの点を反映させることはできなかったけれども、パスパ文字の一音節が縦横に整然とならんでいるところは漢字文書の風格を髣髴とさせるものがある。最後の 20、21、22 行については、一音節分の余白がとられており縦横整然と並んでいる。この点は上の翻字に反映させた。

さて、これは『KOTONOHA』24 号(注 5)で述べたことであるが、パスパ文字モンゴル語聖旨の初頭三行の定型句には、多めの余白「-----」による意味の区分に対応した分かち書きの型が幾つかみられる。型(3行目だけを分ち書きする)、型(1、2、3行を共に分ち書きする)、型(分ち書きしない)というものである。本碑はこのうち、型(3行目のみ分ち書き)に相当する。

なお、13 行と 14 行の間の上部分および 20 行と 21 行の間の下部分に、小字のパスパ文字で「b•o」(寶)とあることについては周知のことであろう。

漢語訳部分

Franke1966 所載の拓本により、照那斯図 1991 と呼格吉勒図・薩如拉 2004 を訂正する。照那斯図 1991 と呼格吉勒図・薩如拉 2004 は「・・・軍人每根底城子達魯花赤官人每根底・・・」とするが、「城子」と「達魯花赤」の間に「裏」を挿入すべきである。照那斯図 1991 と呼格吉勒図・薩如拉 2004 は「・・・拜天祝壽者麼道有來・・・」とす

るが、「麼道」の「麼」を削除すべきである（注6）。

3. 字形

本碑のパスパ文字の字形につき気の付いた点が幾つかある。ここで解決のつかない問題も、他の資料との比較対照により意味を見いだすことができるかもしれない、細かいことであってもいちいち記すこととした。

ア. ə は縦に棘のある \overline{n} / \overline{n} （音節中は \overline{n} / \overline{n} ）を主とする。なお中央の横線は \overline{n} （ \overline{n} ）のように水平となっているものが多数を占める。一部に、棘のない \overline{n} / \overline{n} （ \overline{n} / \overline{n} ）がある。後者の幾つかは、あるいは採拓の具合によるものかもしれない。

イ. š はモンゴル語と漢語の全ての例に渡って $\overline{š}$ とする。漢語の精密な表記では、禅母字を $\overline{š}$ š1 とし審母字を $\overline{š}$ š2 とし、両者区別するけれども、本碑文にはそのような区別はない。石壁寺 šī-bi-zhi（12行）の「石」は禅母、先生 sēn-šhi-ḡuḡ（8行）の「生」は審母であるけれども、区別無く $\overline{š}$ š としている。

ウ. パスパ文字モンゴル語碑文では、通常、n は音節初頭で \overline{n} 、音節末でも \overline{n} である。i は音節初頭で \overline{n} 、音節中及び末で \overline{n} である。この両者には丸めの最終部分が閉じているか開いているかという区別がある。とくに音節初頭にあっては開閉のみによって i と区別されるため、この開閉の違いは重要となる。本碑では概ね開閉の区別は保たれているけれども、一部の n にあっては丸めの最終部分が開いており i と同形となる。3行目 q'an、11行目 'eu-ḡen、19行目 za-ra-yin が \overline{n} となっている。これらは音節末の n である。その他、16行目 'a-nu、19行目 ma-nu も同様であり、これらは音節初頭の n である。パスパ文字モンゴル語文では、音節初頭の位置で \overline{n} n と \overline{n} i は丸めの開閉のみにより対立するため、開閉の相違は強く意識に上ったためであろうか、全ての位置でこの違いはよく保たれる傾向にあるけれども、ときに \overline{n} n が \overline{n} n となり両字形が混同することもある。一方、パスパ文字漢語の場合、音節初頭は必ず子音文字で始まることになっている。それで、初頭に母音の \overline{n} i が立たないため、丸めの開閉のみにより両者が対立することはない。丸めの開閉よりも上部の水平線の有無が両者を見分けるわかり易い指標となる。そのためであろうか、 \overline{n} n が \overline{n} n となる例も、 \overline{n} i が \overline{n} i となる例も比較的多い。このことについては、かつて『KOTONOHA』第9号（注7）で述べたことがある。

パスパ文字モンゴル語

パスパ文字漢語

	n	i		n	i
初	\overline{n}	\overline{n}	初	\overline{n}	無
中	無	\overline{n}	中	無	\overline{n}
末	\overline{n}	\overline{n}	末	\overline{n}	\overline{n}

エ. s は通常 \overline{s} であるけれども、本碑では多くが \overline{s} であり、左下が のように枝分かれする。もっとも、5行目 da-ru-qas、8行目 ḡiḡ-gis、10行目 deg-sed、12行目 an-shiḡは

通常の𐰃に見える。後者の幾つかは、あるいは採拓の具合によるものかもしれない。𐰃は『蒙古字韻』のなかにも一例（下二十八 a3）あり、照那斯図 1977（注 8）所掲のパスパ文字チベット語印章にも認めることができる。

オ・k は通常𐰃であるけれども、本碑では𐰃となつている。2 行目 yê-ke。『蒙古字韻』においても通常は𐰃であるけれども、𐰃に類する字形も頻出する。『蒙古字韻』本文の前に収められた「篆字母」の中に𐰃（上六 a4）とある。本文中にも𐰃（上二十六 a3、下四 a8、下九 a7、下十四 b7、下十六 a1、下十八 a2、下二十 b4、下二十二 a9）とある。

4．パスパ文字漢語

漢語をパスパ文字で音写したパスパ文字漢語と、それに対応する漢字漢語を列挙すると以下のとおりである。

先生 = sên-šhi-ŋuŋ（8 行） 太原府 = t'ay-'üen-fu（12 行） 石壁寺 = šī-bi-zhi（12 行）
安僧 = an-shiŋ（12 行） 大都 = tay-du（20 行）

以上、漢字 12 種の内、『蒙古字韻』と一致しないものは、以下の 1 種となる。なお、先に述べたように『蒙古字韻』では禅母字𐰃 š1 と審母字𐰃 š2 を区別するため、厳密には本碑と異なるけれども、この点については š で翻字し言及しない。

ア。「先生」の「先」は sên であるが、蒙古字韻は sen とする。この点、「安西王マンガラ鼠年（1276）令旨」も同様に sên とし、「クビライ龍年（1280）聖旨」は sen とする。

5．漢字音写モンゴル語

モンゴル語を漢字で音写した漢字モンゴル語と、それに対応するパスパ文字モンゴル語を列挙すると以下のとおりである。これらの対応は、モンゴル語と漢語の当時の音韻の状況を考える上で貴重な資料となる。もっとも、モンゴル語は複数形で漢字音写語は単数形という対応上の相違がある。また、パスパ文字モンゴル語の音節と漢字に想定される規範的なパスパ文字綴りとは直接の関係はない。

da-ru-qas（5 行）= 達魯花赤、jīŋ-gis（8 行）= 成吉思、êr-k'e-ud（8 行）= 也里可温、daš-mad（8 行）= 荅失蠻。

「安西王マンガラ鼠年（1276）令旨」および「クビライ龍年（1280）聖旨」は daš-mad を達失蠻とするが、本碑は荅失蠻とする。daš-mad の da の音写にどのような漢字を用いるかということが問題となる。蔡美彪 1955（注 9）により、その傾向をみると、初期の碑文に「達」を用いたものが数例あるものの、それ以外は全て「荅」（同書は「答」とするが同字）とある。他方、同書によると、da-ru-qas 達魯花赤の da は、全例が「達」とある。聖旨碑などに使用される文字は、音写用の文字も含め、いくらか一般の文書の場合とは異なり、前例に関するなどして慎重に選ばれる傾向にあったであろうから、用字に変更のあるものについては、何らかの説明を与えることができればそれに越した事は

ない。そこで、こころみに『至元訳語』(元代の漢字音写モンゴル語語彙集、蒙古訳語ともいう)の状況を見ると次のようである。語頭に da を持つ語は 13 あり、その内「蒼」を用いるもの 11 例、「達」を用いるもの 2 例となっている。2 例は「達里耶赤(種田人)」と今問題にしている「達魯花赤(宣差)」である。なお前者の「達里耶赤(種田人)」であるが、この語を構成する「達里耶」に相当するものとして、他の個所に「蒼里耶(田禾)」として出てくる。残念ながら蒼失蠻にあたる語は現れない。

これだけでは何とも言えないけれども、敢えて印象を述べれば、達魯花赤という表記は比較的早期に作られ職名として固定し、達失蠻と蒼失蠻については何らかの理由により「蒼」が適当と判断され蒼失蠻が常用されるに至った、というところであろうか。da の表記として、「達」よりも「蒼」が好まれたように見えるわけであるが、その理由がどこにあるか、なかなか難しい。字画の数は「蒼」の方が少なく音写用の字として有利であることは明白であるけれども、或いはそれだけでなく、字音の問題も絡んでいるかもしれない。更科慎一 2003(注 10)によると、明代の漢字音写モンゴル語資料において、「音訳漢字の声調選択(どの調類の字を好んで用い、どの調類の字を忌避するか)に関し一定の傾向がある」という。「達」(入声全濁音声母)と「蒼」(入声全清音声母)の元代における調値がどの様であったか諸説あるけれども、少なくとも『中原音韻』では「達」は陽平声と、「蒼」は上声と関係付けられており、両者異なる調値となる有力な方言があったことだけは確かである。元代の資料において、入声字の声調の異なりと音写用漢字の選択に何らかの相関があるかどうか興味深いところである。

注

1) 呼格吉勒図・薩如拉 2004, 『八思巴字蒙古語文獻彙編』内蒙古教育出版社。pp.1-10 参照。

2) Franke, H. 1966, Eine Unveröffentlichte 'P'ags=pa=Inscription aus T'ai=yüan, *Asiatische Forschungen*. No. 17, 1966, pp. 49-57.

3) この翻字案は「言語文化接触に関する研究」(AA 研。平成 12 年 3 月 24 日)で公表し、その後改訂を加えたものである。

4) 照那斯図 1991, 『八思巴字和蒙古語文獻 文獻匯集』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1991 年。pp. 6-10 参照。

5) 吉池孝一 2004, 「パスパ文字モンゴル語聖旨の初頭定型句の分ち書きについて」『KOTONOHA』第 24 号(2004.11.28), pp. 11-16。古代文字資料館発行。

6) 碑文を校訂したものに祖生利 2000, 「元代白話碑文集録校注」『元代白話碑文研究』下編、2000、北京(中国社会科学院研究生院博士学位論文)があるというが残念ながら未見である。

7) 吉池孝一 2003, 「パスパ文字 n と i の字形の混同」『KOTONOHA』第 9 号

(2003.7.24), pp.14-15。愛知県立大学 E511 研究室発行。

8) 照那斯因 1977, 「元八思巴字篆書官印輯存」『文物資料叢刊』1, 文物出版社, 1977年, pp.68-83。p.69 参照。

9) 蔡美彪 1955, 『元代白話碑集録』北京: 科学出版社。

10) 更科慎一 2003, 「漢字音訳によってモンゴル語を記した明代のいくつかの資料について 研究序説」『中国研究論叢』第3号, (財) 霞山会発行, 2003年, pp.53-68。